

第 6 回

『「鎖国」という外交』(中)

ロナルド・トビ、『日本の歴史』第9巻
小学館、2008年

「鎖国」 = 「開国」！？

前回の発信からずいぶんと時間がたってしまいました。まずは、ロナルド・トビ氏の『「鎖国」という外交』の(上)の内容をかいつまんで復習しておきます。

江戸時代の外交政策は「鎖国」＝「国を閉ざしていた」というのが、多くの人が抱いているイメージだと思います。でも、江戸時代の最初から「鎖国」していたわけではなく、豊臣秀吉や徳川家康のころから東南アジアの国々に日本町ができるほど、多くの大名が朱印船を出し、多くの商人が海外で活躍していました。いわゆる朱印船貿易ですね。また、ポルトガルやイギリスなどの諸外国とも貿易していました。

しかし、ポルトガルなどが宣教師を日本に入国させようとしたり、貿易(商売)を隠れみのにしてキリスト教を持ち込もうとしたり、島原の乱が起きたりしたので、キリスト教対策として、彼らとの関わりを断ってしまったというのが「鎖国」の始まりでした。

また、日本近海ではポルトガルやイギリス・オランダなどが利益獲得をめざして熾烈な競争を展開していて、暴力沙汰も起こっていました。朱印船貿易を続けていると、日本の朱印船が彼らとの争いに巻き込まれてしまう危険性が高くなります。さらに、もし襲撃されたならば、幕府は軍艦を差し向け外国に報復することを求められる事態になりかねません。でも、報復することは、無理な相談でした。

そのようななかで、イギリスがオランダとの競争(アンボイナ事件)に負けて日本市場から撤退します。スペインに続いてポルトガルも日本から追放されました。その結果、西欧諸国のなかでは、オランダのみが残ることになったのでした。



※上記の地図は、国際機関日本アセアンセンターのホームページのなかの「ASEAN PEDIA パートナーシップ ヒストリー」より、転載させてもらっています。

さて、今回取り上げたいテーマは・・・

「鎖国」した後、外国との貿易はどうなったのでしょうか？ なくなったのでしょうか？ 増えたのでしょうか？ 減ったのでしょうか。もし「鎖国」＝「国を閉ざしている」のだとしたら、当然、貿易量は激減したはずですが、実際はどうだったのでしょうか？

鎖国後、貿易はどうなった？

まず、「鎖国」によって交易・貿易はどう変化したのでしょうか？

江戸時代の日本は「鎖国」＝「国を閉じていた」状態だと考えられています。

でも、[山川出版社の『詳説日本史B』](#)の教科書を見ると、日本が外国と貿易をしていたと書いています。具体的には「幕府は貿易を独占することになり」「明清交替の動乱がおさまると長崎での貿易額は

年々増加した」とあります。また、「朝鮮と琉球、蝦夷地」との交易についても詳細にまとめてあります。

では、江戸時代初期から中期の輸出入の品目はどうなっていたのでしょうか？



となっています。輸入に関しては圧倒的に生糸および絹織物が多く、金額で言えばこの2品目で、輸入のほとんど全てと言ってもいいくらいでした。



※繭の写真は佐藤康行さんのHP『ヤスの成る木』から「生糸と綿糸の違い」という記事から転用させていただきました。繭の美しさが抜群です。

これは大坂冬の陣・夏の陣で豊臣が滅び、「元和偃武」が創出されて世の中が平和になり、社会が安定し、生活が豊かになり、武士を中心に一部有閑階級が贅沢を楽しむようになったからでした。

つまり、膨大な量の生糸が輸入された背景には、奢侈品である絹織物に対する需要の増大があったわけです。ちなみに、生糸4キロから成人用の着物が3着できたといえます。当時の生糸輸入量を着物に換算すれば、何十万人分もの着物が作られたり売られたりしたことになります。江戸初期に、すでに一部の上流階級だけでなく、生活水準の上昇によって、より広い絹織物需要が形成されていたことがわかります。

なお、日本が輸入していたのは、「絹織物」という完成品よりは、「生糸」という原料でしたから、日本国内に絹織物業の発展があったことがわかります。

では、絹織物業の中心はどこでしたっけ？

そうですね、京都の西陣でしたね。



ロナルド・トビ氏はその著書『「鎖国」という外交』のなかで**西陣の絹織物業**について、次のように指摘しています。

養蚕業は、その数百年も前から国内経済に重要な位置を占めていたが、戦国時代末頃から需要に供給が追いつかなくなり、輸入への依存度を増した。そして国産の生糸よりも、白糸と呼ばれる中国産の高品質のものに人気があった。すでに貿易が下火になっていたとされる享保元（1716）年段階でも、西陣織で知られる京都西陣で利用される織物の原料となる生糸は、その57%強が外国産・舶来品だったと言われている。元禄から享保期の京都は日本最大の産業都市であり、なかでも西陣の織物産業は、最大の雇用を生み出す一大産業だった。元禄13（1700）年の京都の庶民人口31万7937人のうち、その21%強に当たる約6万7600人が、西陣の織物産業に従事するか依存して生計を立てていた、という推計もある。

一業種に限っての話ではあるが、西陣の織物産業や、ひいては京都の経済自体が、織物の原料である輸入生糸に大きく依存していたことは疑いない事実である。絹織物を扱う流通・商業・加工機構にいたる周辺産業も、その強い影響下にあったことは言うまでもない。

上記にあるように、中国産の生糸は品質が高く、特に「白糸」と呼ばれていました。この白糸貿易を独占していたのがポルトガル人で、莫大な利益を得ていました。幕府はこれに対して1604（慶長9）年、糸割符の法を定め、京都・堺・長崎の商人に糸割符仲間をつくらせ、これに専買権を与えて一括購入させるようになりました。

この制度を何と呼びましたっけ？

そう、**糸割符制度**でした。

糸割符仲間は後に「五力所商人」と呼ばれますが、**京都・堺・長崎の三力以外の都市はどこですか？**

江戸、大坂の2都市でした。

この糸割符制度のおかげで、ポルトガル商人らの利益独占を排除することに成功します。（補足しますと、1655年＝明暦元年に一時撤廃し、競争入札による相対自由貿易となります。そして1685年＝貞享2年には復活します。）

さて、下の表を見てください。江戸時代の初期、日本とオランダの貿易のデータが**松本一夫氏の『日本史へのいざない～考えながら学ぼう～』**（岩田書院）にありますので、紹介させていただきます。

オランダからの生糸輸入量の変化

年代	量	できごと
寛永10(1633)		奉書船以外の海外渡航・渡航者の帰還を禁止（鎖国令のはじめ）
11(1634)	38.4トン	長崎に出島築き外国人を移す
12(1635)	55.2トン	日本人の海外渡航の禁止・在外日本人の帰国を禁止（鎖国令強化）
13(1636)	110.4トン	海外密航・帰国者の処罰規則を決める
14(1637)	115.2トン	島原の乱おこる
16(1639)		ポルトガル船の来航禁止
17(1640)	163.2トン	
18(1641)		オランダ商館を平戸から長崎出島に移す（鎖国の完成）

表を見ればわかる通り、「鎖国」が始まり強化されているにも関わらず、オランダからの生糸の輸入量は増加していますよね。「鎖国」が始まる前はポルトガルから輸入していた生糸を、「鎖国」の前あたりからオランダから輸入するようになったんですね。だからこそ、ポルトガルを「追放」できたのでした。ただし、ポルトガルもオランダも彼らが作った生糸を日本に売っているわけではありませんでした。彼らもたらす良質の生糸は「メイド・イン・チャイナ」でした。

では、**輸出はどうなっていたのでしょうか？** 教科書では金や銀が主要な輸出品と書いてあります。でも、厳密に言うと、金や銀は、「輸出品」ではありません。正しくは、**輸入品に対する「支払い代金」、つまり輸入生糸の対価として支払われた**わけでした。

今からは信じられないことですが、江戸時代の初期、日本の金銀の生産量は非常に多かったために、支払いに金や銀が使われたわけです。

17世紀初期に、日本の銀生産高は年間20万キログラムに達し、1601年から20年に世界の銀の

生産高は42万キログラムだったので、**世界全体の生産高のなんと2分の1に近い量を日本一国で生産**していたことになります。

長崎貿易を通して中国・オランダ船によって輸出された銀は、糸割符制度が機能していた時期は、おおむね年間1万貫程度で推移していました。ところが明暦元年（1655年）に糸割符制を廃止し、「相対商売」によって国内商人の自由な取引に委ねるようになると、生糸の輸入が増大し、その対価である銀の輸出高は一気に上昇し、1660年頃には2万貫を大幅に上回るほどになります。

これに対し、幕府は大量に輸入される生糸の代価として、大量に銀が輸出されていたことを憂慮し、その輸出を抑制ないし禁止しようとした。幕府は銀貨の流出を食い止めるために、寛文4年（1664年）に金貨による支払いを認め、さらに同8年（1668年）には銀の輸出を禁止します。1670年代には長崎貿易における輸出の主力は、金・銀から銅へと移行してしまいます。

日本の銅は世界をめぐる！！

ここで質問です。江戸幕府が銅を輸出の主力品に切り替えたのは、ある豪商のすすめた銅山開発の成功が背景にありました。では、その豪商とは誰でしょうか？ また、その豪商が開発した銅山の名前は何か？

答えは、住友家（蘇我理右衛門ならびに住友政友が住友家の祖と言われています）の「別子銅山」でしたね。

1690年（元禄3年）に発見された別子銅山ですが、1698年には約1500トンもの銅が生産され、当時としては世界的な産銅高を記録したと言います。

ところで、別子銅山がある場所は、今の何県でしょう？

愛媛県（昔の伊予国）でしたね。

徳川家康が豊臣秀頼を滅ぼす大坂の陣のきっかけとなったのが「方広寺の鐘銘事件」でしたが、角川書店発行の『歴史誕生』第15巻によると、その鐘や大仏を鑄造するための銅を納めた業者が、住友家でした。1671（寛文11）年の資料によれば、長崎から輸出された「棹銅（長さ25cm、重さ300gの細長い銅の延べ棒）」の約4割を住友が生産していたと言います。

住友は輸出用の銅の延べ棒（棹銅）の生産と寛永通宝の原料を幕府に納入することで発展し、豪商の仲間入りを果たしていくことになります。

話をもとに戻しましょう。16世紀から17世紀にかけて、日本は世界有数の金産出国であると同時に銀産出国でした。それが、17世紀から18世紀にかけて、日本は世界最大の銅産出国になります。

では、日本が輸出した銅は、各国でどのように使用されたのでしょうか？

まず、東南アジアにおいては、自国の通貨を持たないため、日本から輸出された銅銭がそのまま使用されていました。日宋貿易や日明貿易において、日本が宋や明から輸入した銭をそのまま使用したのと同じですね。

また、中国やインドでは銅の延べ棒の「棹銅」を日本から輸入して、自国の通貨を鑄造していました。清国では18世紀初頭、日本の銅なしでは貨幣鑄造は不可能だったと言えるほどです。

また、オランダ東インド会社は日本の「棹銅」を輪切りにして貨幣を造り、インドネシアやスリランカで流通させていました。さらに、東アジアから集めた生糸・絹織物を日本に運び、その代価として得た日本の銅銭を東南アジアに輸出していました。1633（寛永10）年から1637年までに平戸から輸出された銅銭の量は、なんと1億281万9000個だったそうです。

ですから、現在でも、インドネシアのバリ島では寛永通宝が大量に残っていて、しかもヒンズー教の儀式で使用されているそうです。



オランダは生糸などの支払い代金としての銅を東南アジアで流通させていただけではありません。むしろ積極的に日本から銅を輸入するようになります。オランダの東インド会社は日本の銅をヨーロッパに運び、東インド会社で労賃等に支払う銅銭に鑄造する一方、その多くを銅市場で売却して利益をあげます。

イギリスの**アダム・スミス**はその著『**国富論**』（1776年）のなかで、日本の銅がヨーロッパの市場でおおきなウェイトを占めていたことを、次のように述べています。

「日本の銅の価格は、ヨーロッパの銅山の銅の価格に対して、必ず何等かの影響を持っている」と。

江戸時代、日本の銅や銅銭は東アジアや東南アジアの国々だけでなく、ヨーロッパでも、流通していたのです。まさに、日本の銅は世界をめぐるにいたんです。これって、本当に「鎖国」＝「国を閉じていた」と言えるのでしょうか？

(このあたりのことは角川書店発行の『歴史誕生』第5巻、第15巻を参考にさせていただきました)

では、江戸時代の中頃には、輸入はどうなっていたのでしょうか？

実は、支払代金は莫大なものになっていましたから、輸入量は増加していたと言えます。いったい、いくらくらいだったのでしょうか？

これについては、「正徳の治」で有名な新井白石の『折りたく柴の記』(桑原武夫訳、中公クラシックス、2004年)のなかで、次のように詳しい報告がまとめられています。

御先代のとき、長崎奉行書に命じて、貿易のために費やされた金・銀・銅の数をお尋ねになったとき、「慶長六年から正保四年までの計四十六年間のことはよくわからない。慶安元年から宝永五年にいたる計六十年間に、海外に流出した金は二百三十九万七千六百両あまり、銀は三十七万四千二百二十九貫あまりである。銅については、寛文二年以前の六十一年間のことはよくわからない。寛文三年から宝永四年にいたるまでの計四十四年間に、十一億一千四百四十九万八千七百斤あまりに達した」と答えた。これは慶安元年以後、奉行所でわかっただけの分である。それ以前には、長崎だけのことではなく、前にも書いたように、外国船は我が国のここかしこに来て商い、我が国の船も、外国のここかしこにいて商売をした。このほか対馬から朝鮮に入ったもの、薩摩から琉球に入ったものなどは、すべてその数量をはかることができない。

しかし、試みに、長崎奉行所から書き記して差し出したところを基礎として、慶長以来の計百七十年間に、外国に流出した金銀のおよその数を計算し、また慶長以来、国内で鑄造された金貨・銀貨のおよその数と比較してみると、金は四分の一が失われ、銀は四分の三が失われたことになる。だから、今後、金は百年たてばその半分がなくなり、銀は百年以内に、我が国で使用すべきものはなくなってしまう。銅は、すでに今海外貿易の材料に足りないだけでなく、我が国の一年間の使用量にも足りないのである。我が国に産出する永久の宝ともいふべきものをむだ使いして、外国から来る、ただ一時の珍しいものであそびものと交換し、そうした取引のために我が国威を落とすようなことは、適当とは思われない。

つまり、正確にはわからないけれども、1648(慶安元)年から1708(宝永5)年までの60年間に金139万7600両余、銀37万4229貫余、であると計算し、さらにその前の1601(慶長6)年から1647(正保4)年までの46年間にその2倍はあったと推定しています。これでいくと1601(慶長6)年から1708(宝永5)年までの108年間に流出した日本の貴金属の量は金719万2800両と銀112万2687貫となり、それは慶長以降の総産出量の、金はその1/4、銀はその3/4にあたり、このままほうっておけばあと100年もすると金は半分になってしまい、銀にいたってはそこまできかないうちに零になってしまう、というのです。

これが真実なら、日本は江戸時代の初めから、大幅な貿易赤字を抱えていたということになります。「国を閉じていた」はずなのに、外国と積極的に貿易をして、しかも輸入超過に陥り、貿易赤字が激増していたわけです。

どうやら、日本が「鎖国」＝「国を閉じていた」という考えは正しくない、ということなんですね。そもそも「国を閉じていた」のなら貿易ができるはずがありません。幕府が認めた地域においては（たしかに限定された窓口ではありますが）、海外に向かって「開かれて」おり、頻りに国際交流と貿易が行なわれていたと考える方が正しい、ということになります。

「輸入代替品」をつくろう！

江戸時代の日本は「国を閉じていた」わけではなかった、ということが確認できたと思います。では、海外に向かって「開かれて」貿易をしていた結果、日本はどのように変わったのでしょうか？

結論から言うと、「鎖国」政策によって貿易が制約・統制されていたから、主要物産の「輸入代替化」が実現して、国内産業はむしろ発展していったと言えます。

銀の輸出が一段落した17世紀末、貿易が日本の一国経済に占める割合はどの程度だったのでしょうか？

このあたりのことは、経済に関する力作である『趣味の経済学 アマチュアエコノミストのすすめ』というホームページの中に「大江戸経済学」という特集記事がありますが、そこから紹介させていただきます。

1686年～1700年の15年間の金銀銅を主体とする輸出は、銀目で1万貫を超える程度でした。これは当時の実収石高に対してほぼ1%に相当するそうです。「鎖国」令以前の輸出高は4から5万貫、石高に対して5から6%だったそうです。

この輸出高が国内の物的生産高の1%程度ということは、「鎖国」により国内産業が促進されていたことの証明と言えます。

ちなみに、現代日本の貿易の割合はGDP比でどのくらいになるのでしょうか？

日本の貿易状況を調べてみました。年度により大きく数字が異なりますが、その結果は・・・

輸出依存度 → 15%前後（韓国は40%前後、ドイツは30%強、アメリカは10%弱）

輸入依存度 → 15%前後（韓国は40%前後、ドイツは30%弱、アメリカは15%前後）

になります。

こうしてみると、江戸時代ほどではないですが、現在の日本は「内需型」国家なんですね。「鎖国」

しているわけではないのに、貿易依存度は先進国の中で極めて低くなっています。ちょっと意外な感じがします。また、アメリカの貿易依存度が低いのにもびっくりしました。

さて、さきほどの**金・銀流出という事態に対して、新井白石は貿易量を制限して対処**しようとした。1715(正徳5)年に**正徳新令**を發布します。主な内容は以下のようになっています。

- ①貿易総額は対オランダ5万両、対中国6千貫ですが、それ以外に俵物等による代物替3千貫を認めただけで、銅代物替は廃止。
- ②銅の輸出に上限を設け、対オランダ150万斤、対中国300万斤とし、これはその価格分を貿易総額から差し引いて計算する。
- ③**貿易船の入港数にも制限をつけ、毎年オランダ船は2隻、中国船は30隻まで**としました。

ところで、**新井白石が活躍したときの将軍は誰でしたっけ？**

第6代徳川家宣、第7代徳川家継ですね。彼は侍講として、**正徳の治**と呼ばれる政治を推進していきました。

同じ時期、側用人として白石とともに活躍したのは誰でしょうか？

そう、**間部詮房**でした。

さて、正徳新令の結果、オランダはこれまで4~5隻が入港していましたが大きな痛手になりました。でも、これは根本的な解決にはなりません。なぜなら、清や朝鮮から生糸・朝鮮人参などを大量に輸入したいという日本人の欲望は変わらないからです。それに対して、**田沼意次**は積極的な収支改善策をとることになります。

田沼意次が実施した改善策とは何でしょうか？

1つが朝鮮人参の国産化です。朝鮮人参は、和漢薬のエースとでもいうべき存在で、朝鮮貿易の中心でした。田沼意次はこれを国産化することを企てます。朝鮮と似た風土を探して上野国の今市付近を選定して種をまき、栽培してみたところそれに成功。薬効も朝鮮産のものと異ならない、という結論が出ます。そこで、これを幕府の専売として、**人参座**を作ります。これが1763(宝暦13)年のことでした。

単に国産化したわけではありません。なんと1819(文政2)年には**国産の朝鮮人参を中国に輸出する**というところまで、輸出産業として成長させたのです。**金銀の流出原因だった朝鮮人参が、逆に外貨を稼ぐ産業にまで成長**していったのです。(このあたりについては『**趣味の経済学 アマチュアエコノミストのすすめ**』のなかで、8代将軍徳川吉宗の改革や平賀源内の活躍について紹介されています)

2つめが「俵物」です。1764(明和元)年に、田沼意次は中国輸出向けの煎り海鼠(なまこ)及び乾し鮑(あわび)を増産するように、諸国に命じます。生の海鼠や鮑の漁業になれていない漁村や、せっかく生の海鼠や鮑を採っていても、中国人の好む製造方法を知らないために、加工していない漁村がかなりあったからといます。

このような輸出振興策により経常収支は改善されていくことになりました。

ところで、ロナルド・トビ氏の著書『鎖国という外交』で勉強になったことがほかにもあります。それは「藩札」の発行です。少し引用が長くなりますが、

18世紀初頭の正徳の治を主導したとされる新井白石は、江戸開府以来の約100年間に对外贸易によって日本から流出した銅の量は年間平均300万斤（約1800万トン）であると見積もった。だが、後の岩生成一による正確な計算によれば、17世紀末の20年間には、白石の計算をはるかに上回る年間平均2500トン以上の銅が流出していたことになる。さらに日朝貿易に関する田代和生の研究によれば、その最盛期とされる17世紀末の天和から元禄初期において、日本の年間新鑄造銀貨の10%が輸入品の対価として朝鮮に流出していたため、对外贸易による銀貨の海外流出が、国内の銀貨供給を大きく左右していたことが明らかになっている。

国内での貨幣の供給不足は、各藩の財政難とも相まって、これ以降、近世を特徴付けるうえで重要な、藩札と呼ばれる紙幣の登場を促した。藩札は、銀10匁に相当する証券として、寛文元（1661）年に福井藩で初めて発行された。そして宝永4年（1707）年にいったん禁止されるまでの数十年間、名古屋から九州にかけての西日本を中心に、藩独自の銀証券が発行されたのである。

金銀という金属貨幣が激減したために、諸藩は「藩札」という紙幣を金貨・銀貨の代替物として作ったのです。



うーん、感心しますね。日本人は、ふだんは独創性に乏しいような感じがしますが、困った事態になると、輸入・移入したものを日本風アレンジしたりするのはもちろんのこと、それをヒントに全く新しいものを創り出していくんですね。中世から近世にかけて最大の輸入品だった生糸が、幕末からは最大の輸出品に変わり、外貨を稼いでいくようになるのも、すごいし、面白い！！